てら子屋 Interview

学びの共同体へ、進化する学校

東京大学教育学部附属中等教育学校の総合学習から

中高一貫校として半世紀以上の歴史を持ち、総合学習の取り組みを長年続けてきた東京大学教育学部附属中等教育学校。生徒たちは総合学習を通じて、どんな力を養うことができたのだろうか。同校の草川剛人副校長に話を聞いた。

草川 剛人
東京大学教育学部附属中等教育学校副校長

聞き手 中間 真一
HR－社会研究部主任研究員

子どもはよく生きようとしている

中間　教育に関する議論が、かまびすしいこの頃ですが、教育現場から遠い大人たちの世界で騒いでいることが、現場を迷走させているようにも感じられます。たぶん、子どもたちは大人の騒ぎを冷ややかにとらえているのではないかと想像するのですが、現場の草川先生は子どもたちの様子をどのようにご覧になっていますか。

草川　私は、今の日本の大人たちの子どものとらえ方は間違っていると思います。子どもたちは、よく生きようとしています。だから未来があるんです。子どもたちは、やはり生きることに前向きです。そして、よく笑います。それなのに、大人たちによって彼らの未来を閉ざすようなことが、そこらじゅうで起こっているのです。

　また、子どもたちは大人が思っている以上にナイーブでやさしいです。だから、大人から言われていることを、彼らなりに感じ、受けとめています。例えば学力低下問題もそうです。しかし、何の役に立つのかはっきりしないのでは、勉強する気にならないと言うのです。あまりにも、学ぶということを功利主義的にとらえてしまっています。これは、いつの間にか大人社会、経済社会の論理が教育の世界に入ってきたということです。

　そして、子どもたちのストレスは大きいのです。最も大きなストレスは、時間に追われることではないかと思っています。子どもには子どもの時間があるのです。中学1年には中学1年の時間がある。高校生には高校生の時間がある。それを、教師のご都合主義で「もっと、早くしろ！」とせかすわけです。学校の外に出ても、家庭の中であっても「早くしなさい！」がつきまとう。これが、大きなストレスになっているのです。

　そんな中でも、大半の子どもたちは、本校の生徒たちを見ていても、よく生きようとしています。子どもたちに文句を言っている大人たちは、自分が子どもだったときのことを思い出すべきです。教師も、中2の授業をするときには、中2の自分が向こう側にいることを想像できなければいけない。大人の子ども

に対する想像力が必要なのです。

中間　子どもがおかしいのではなく、大人が子どもをおかしくしているというのは、私も同感です。学校の生徒たちが、前向きによく生きようとしているということを聞けて安心できました。しかし、今の子どもたちは、大きな時代の変化の中にいることは間違いないでしょう。そんな中で、学校の不易の価値とは何でしょう？

草川　私は、学校とは「駅」だと思うのです。未来に向かう駅です。人間が生きていくときの、乗り換えのための駅です。社会が変わったとしても、学校は子どもたちが未来に向かって生きていくための駅であることに変わりはないと思っています。

「本物にぶち当てる」ことが大切

中間　一方、変わる学校のあり方として、最近注目を集めている中高一貫教育があります。また、総合学習というスタイルの是非も議論されています。草川先生の東京大学教育学部附属中等教育学校は、すでに半世紀以上の中高一貫教育の歴史を持っていますし、その中で総合学習の取り組みも続けてきています。そこで、まず総合学習の取り組みを始めたきっかけやテーマ内容、草川先生から見た総合学習の意味などをお話しいただけますか。

草川　本校の前身は7年制の旧制東京高等学校ですが、戦後の学制改革を経て、東京大学教育学部の附属中学校・高等学校として生まれ変わりました。それ以来、ずっと6年制の中高一貫校として歩んできたわけですが、やはり6年間というのは長いんですよ。受験がないので、どうしても中3、高1が中だるみしてしまいます。そこで、危機感を持った当時の先生方が、中3と高1を対象に、「特別学習」という形で教科にとらわれない授業を始めました。

　そこでは、1年間かけて普通の授業ではできないことをやろうということになりました。例えば、解剖をやりたければ、1年間解剖をやってもいいし、紙飛行機を飛ばしたければ、流体力学から研究してもいい。フランス刺繍が得意な先生はフランス刺繍を教えるというように、技術的なことや体験的なことを中心に、思いっきり面白いことをやらせました。それが現在の総合学習の出発点です。

解剖実習
撮影：酒井 吉温

　この特別学習は選択制で、中3と高1の2学年混合で行いました。あらかじめ決めた、いくつかの課題別にグループをつくり、2年間で二つのテーマに取り組みます。1年後には発表会を行い、生徒全員の投票によって1位から3位まで順位を決めるのです。

　さらに、この特別学習が定着してくると、そういったものを生徒全員にやらせたいね、ということになり、卒業研究が生まれました。これは高2になった春に自分でテーマを決め、指導教員がついて、全員が行います。そして、高3の夏休み前までに約1年半かけて、研究なり作品なりを仕上げる。

　私たちは、卒業研究を始めるときに、三つのことを決めました。まず子どもたちの話をよく聴く。もし自分が不得意なことであれば、得意な人を探してきて生徒に会わせる。そして最後に、教師の労働強化にならないようにするということでした。

　テーマは何でも構いません。生徒が本当にやりたいと思うことを自発的に行うのが基本です。最初は鉛筆で書いた30枚ぐらいのレポートだったのですが、いつの頃からか、このようにちゃんと製本した分厚い報告書になっていった。これは教師が指示したわけではありません。ある学年が何かすると、次の学年がそれを乗り越えようとする。そこが生徒たちの力のすごいところだと思います。

　中1と中2には、グループ学習という今の総合学習に似たものがありますが、生徒には「仲良し同士では集まるな」と言います。例えば、「神田川について調べる」という課題では、環境だったら、環境に興味を持つ人間がグループを組む。つまり同じ問題意識を持っている者同士で行います。したがって、クラスもバラバラです。

　仲良しで集まったグループは、ほとんどうまくいきません。そこに、この総合学習のすごさがあります。テーマが命。だから、どうやってテーマを設定するか、よく吟味する必要があります。そうしないと、総合学習を取り入れたとしてもうまくはいきません。

　あとは、「本物にぶち当てる」

ということです。それがとても大切。すると、生徒たちは、「とにかくこれが知りたい！」ということで突っ走り、毎年我々が驚くような結果を出してくれます。

中間　そのような総合学習の場を成立させるには、先生たちの役割が重要だと思います。総合学習を成功させるには、先生にどんな力が求められるのでしょうか。

草川　教師はコーディネーター、またはファシリテーターだと思います。例えば、ここに追及すべき課題があるとします。今までの教師は、これを自分がわかる範囲で学び、それを生徒に教え込みました。しかし、総合学習では教師は生徒の少し前にいて、生徒に「こうやってごらん」「ここから攻めてみたら」とアドバイスするのが役目です。

　例えば、私の専門の日本史でいうと、今までは私が日本史の本を読んで、私なりのキャパシティで解釈し、それを生徒に教えていました。しかし、総合学習では調べたり、解釈したりするのは生徒自身です。教師はそれをサポートするだけです。したがって、教師には、生徒をよりよい方向へ導く能力が求められます。ある意味で、これはとても難しい。自分で教えた方が、ずっと簡単ですから。しかしそれは、はっきり言って植民地時代の教育です。識字率や民度が低く、文字や計算を覚えることが優先された時代の教育です。ポスト産業社会の教育としては通用しません。

　総合学習は、ポスト産業社会の動向にうまくリンクするものでした。ところが日本の場合、いつもそうなのですが、そのための条件整備をしようとしない。だから、せっかくよい芽が出ても、うまく育ちません。その結果、総合学習はダメだということになってしまいます。残念でしょうがない。

　この学校には、東大生が教育実習にやってきます。彼らと酒を飲んで話したりすると、多くの学生が「僕らは、やりたいことをやってこなかった」と言います。それは、親や教師が「学力をつけろ」の一点張りで、子どものやりたいことを尊重せず、点数、順位、偏差値という数字の向上だけを目標に、トップを目指してきた結果なのだと思います。だから、大学生になっても「自分が何をやりたいのか、わからない」と嘆くようになる。研究テーマや職業は、数値で序列化されていないから、自分自身で価値判断できないのです。

　それに比べると、本校の生徒たちは、実に伸び伸びしています。はっきり物を言うし、物おじもしない。教育実習に来た学生が、「あんなに、やりたいことを持っているヤツがいることに驚いた」と、よく言います。視察に来た先生方も「なぜ人前であんなにしゃべれるんですか？」と驚きます。それはやはり、1年生のときから積み上げてきた総合学習の成果なのだと私は確信しています。

子どもの力をもっと信じていい

中間　人前で物おじせずにしゃべることと、総合学習は関係があるのですか。

草川　もちろんあります。総合学習には発表があるからです。総合学習で1年間学んできた成果は、朝の10時から数時間かけてすべて発表します。発表時間は1グループ5分ぐらいですが、生徒たちは1年間やってきているわけですから、「もっと、発表時間を長くしてほしい」と言います。しかし、32グループあるので、1グループ5分としても3時間近くかかる。だから、時間厳守です。5分経つと無情の鐘が鳴らされます。5分で自分たちの1年間を伝えきるというトレーニングなのです。

　発表の方法も、OHP、ポスターセッション、実物投影、影絵、紙芝居、演劇、人形劇といろいろです。その内容に最もふさわしい方法を考えます。それも、小学校のように、全員が並んでひと言ずつ順番にしゃべる、というような方法は取りません。発表は話すのが得意な生徒が行い、ほかの生徒は裏方に回る、というふうにそれぞれが役割分担をし、グループとして最高のパフォーマンスを発揮することに徹します。

中間　なるほど、総合学習は、確実に生徒たちの将来への力になっているという印象を受けます。発表のほかには、「子どもたちに力がついたな」と先生が実感できるのは、どんな場面でしょう？

草川　発表のほかには、文章が書ける、それから、きちんと人

に出会えるという点もあります。依頼の手紙やお礼状なども書けるようになります。文章を書くのが苦にならない。何しろ1年生のときから毎回1600字書かせていますから。物を言えて、書ければこそ、他人とのコミュニケーションが可能になりますから。

中間　それらの力は、彼らが卒業してからも、順調に積み上げられているのでしょうか。

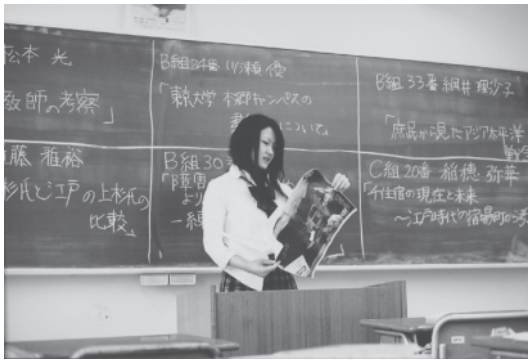
草川　大学に入った卒業生たちが訪ねてきて、「レポートを書くのがいやじゃない」と言います。周りのほかの学生はレポートですごく苦労するらしいのですが、「うちの学校では、このくらい中1のときからやってたよ」とか言って、どんどん書けちゃうわけです。それから、ゼミの幹事などになっても、概してグループをまとめるのがうまいようです。

　ただ、批判もあります。なぜ卒業研究を受験のときにやらせるんだ、という批判です。そのため、昔は提出が高3の9月だったのですが、現在は7月になりました。その変更直後は、卒業研究の質が少し落ちたのですが、3年目にはちゃんと回復していました。やはり、子どもの力はすごいです。ですから、先生たちは子どもの力をもっと信じていいと思います。

「学びの共同体」を授業に導入

中間　受験の話題が出ましたが、「総合学習」に対して、「教科学習」もあるのが学校の現実です。総合学習で、子どもたちがいろいろと不思議を感じたり、もっと知りたくなったりしたことを、さらに深めようとすれば、大学に進学して研究する必要が出てきます。そこには入学試験が待っているわけです。せっかく、豊かな総合学習で動機づけられても、受験勉強としての教科学習が十分でなければ、大学へのステップを越えられないという現実があります。

草川　実は今週の土曜日（1月27日）に、生徒と保護者と教員が参加して話しあう、三者協議会というものが開かれます。テーマは「家庭学習を充実させるためには」です。なぜ、そのテーマなのかというと、実はかなりの生徒が、成績評価で1を取るからです。前期課程（1年生～3年生）では合わせて50人ぐらい。後期課程（4～6年）では、100名ぐらいが1を取る。つまり、生徒たちが勉強をしない、というわけです。しかし、それで終えられる問題ではありません。



　親の世代と違って、今の子どもたちには楽しいことがいっぱいあるから、学校の授業はつまらないという人がいます。それはかなり乱暴な言い分です。皆さんも振り返ってみればわかるように、中1なら中1なりに追及する力を持っています。しかし、経験が少ないから全面的ではない。大人はいろいろ経験しているから、興味を持つものがあってもむやみに突っ走りませんが、子どもは「これだ！」と思ったら、パーッと突っ走る。そこに若さの秘密があります。

　そこで、東大の教育学部長だった佐藤学先生が提唱する「学びの共同体」を2年前から授業に導入しています。その特色は、教室の机といすをコの字型に並べ、授業の中にグループ学習を入れることです。教師が一方的にしゃべる授業はやめ、生徒に高度な問いを出し、それについて探求させます。生徒同士が学びあうようにする。

　3年前の9月には、5年生と6年生合わせて120名から140名の成績不振者が出たのですが、「学びの共同体」を取り入れて1年目の同じ時期には、成績不振者が70名に減りました。今年はまたちょっと増えましたが、それは「学びの共同体」が1、2年で完成するものではないからです。10年はかかるといわれています。

中間　つまり、「学びの共同体」では、総合学習と教科学習は別物扱いする必要はないということでしょうか。

草川　実は、総合学習を学習指導要領に入れたとき、教科学習に総合学習のやり方を取り入れる、ということが前提になっていました。

　例えば、社会科には、系統学習と問題解決学習という二つの学習方法がありますが、総合学習は問題解決型になります。教え込むのではなく、生徒の疑問から出発して生徒自身が答えを見つけていく方法です。総合学習を学習指導要領に入れたねらいは、教科の学習にもそうした問題解決型の学習方法を取り入れようということだったのです。しかし、それがいつの間にか、あたかも教科学習と総合

学習が対立するかのようにとらえられてしまったのです。日本人はすぐに二項対立で考えたがるのですが、そうするとたいてい行き詰まります。

教科学習で学んだことは、総合学習に必ず活きます。ある問題を追及していくときに、教科の学習が基盤になるからです。

例えば、英・数・国の3教科を基礎教科と言いますよね。大学で日本史学を学ぼうと思ったら、古文・漢文ができなきゃいけない。数学も関係します。今、日本史研究が一番盛んなのはアメリカですから、英語の文献も読まなければなりません。そういう意味で、英・数・国は全部基礎科目になるわけです。つまり、大学へ行くと基礎教科がすべて問題解決のために使われるのです。ですから、生徒にはそういうこともきちんと教えたいと思っています。

教師は伴走者であり共同作業者

中間　「総合学習」と「教科学習」は本来、対立するものではないということですね。ところで、今まで説明してきていただいた総合学習や「学びの共同体」を目指す授業は、ごく普通の公立学校でもできるでしょうか。きっと、このインタビューの読者の中には、「こんなことは東大附属の学校だからできるんだ」と思う人もかなり出てくると思うのですが。

草川　できると思います。本校には、ほかの学校の先生たちが大勢見学に来ます。私が公立校へ出かけて授業を見た後に検討会をやるのですが、そのときに年配の先生などから必ず出るのが、「東大附属の生徒だからできるんだ」という言葉です。そして、「うちの学校の子はこんなにひどい」と、自校の生徒の悪口を並べ立てる。僕は「へぇ、そうなんですか。ほかには？」と、どんどん言わせます。そして、その先生が全部言い終わった後に、こう言います。「今聞いたことに対してお答えします。先生、教師辞めなさい」って（笑）。

すると相手は当然怒って、「だったら、お前がうちの生徒でやってみろ！」となります。僕は「やりましょう」と言います。すると、ちゃんとできちゃいます。

しかしそのときに、一番けんかした先生が一番の推進力になってくれます。ですから、ある意味で本音でぶつかって議論しないとダメです。本気で取り組めば、本校でやっていることが、ほかの学校でできないなんてことはありません。

中間　それでは、今後とも草川先生に日本中の先生たちにけんかをしかけていただき、「学びの共同体」があちこちに登場することを期待します。さらに、明日の活気あふれる学校づくりに向けて、教師の役割、資質、能力について、最後にお聞かせ願えますか。

草川　学校は生徒が主役であり、主人公です。教育学の授業などでは、授業をする教師が主体だと教えられるようですが、もうそういう時代ではありません。そして、さっきも言いましたが、教師はファシリテーターかコーディネーターであるべきです。課題に向かって、生徒といっしょに進んでいく存在であり、生徒から見れば、いっしょに考えてくれる伴走者であり共同作業者でもあります。教師が教科書を解釈し、それを伝えるという授業は、はっきり言って時代遅れです。

そのためにも、教師には幅広い知識・教養が求められます。社会のいろいろな動きに対して、敏感でなければならない。自分に直接関係のある専門書だけを読んでいる人、インターネットからうわべの情報をとってくるだけの人、そんな人は教師にならないほうがいいと思っています。

そして、これからの学校は、学校の外からどんどん人を呼び入れて、授業や講演を行ってもらうことも重要になります。そうした学校への刺激が、学校や教師を活性化させ、生徒の感性を磨くことにつながると思っています。

くさかわ　たかと
1947年、長野県松本市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了。専門は日本近代思想史。1978年、東京大学教育学部附属中・高等学校に勤務。中学社会科と日本史を教える。写真教材・音声教材を使い、生徒とのやりとりのある授業を追究。2000年、中等教育学校移行とともに現職。著作に『パネル紙芝居　写真で学ぶ戦争と平和』（汐文社）